

神谷充伸：第6回国際藻類学会議報告

本会議は国際藻類学会が主催となり、これまでにニューファンランド(カナダ)、コペンハーゲン(デンマーク)、メルボルン(オーストラリア)、ダーラム(アメリカ)、チンタオ(中国)の順に3年毎に開催されている。今回の第6回国際藻類学会議はオランダのライデンで平成9年8月9日から16日まで行われた。ライデンは国内で2番目に大きな旧市街をもつ都市であるにも関わらず、地元の人たちや学生がのんびりと暮らす、歴史的な伝統をもつ町といった雰囲気である。日本でもお馴染みのシーボルト、レンブラント、デカルトなどが暮らしたのもこの町である。8日間の会期のうち4日間で基調講演4、シンポジウム64、口頭発表154、ポスター発表338について発表・討論が行われた。前回のチンタオの会議と比べるとシンポジウムとポスター発表の数がかなり増えている。出席者は600名近くいたが、本会議はアメリカ藻類学会とジョイントという形で行われたためかアメリカからの出席者がかなり多かった。

会議はライデン大学と大学から歩いて5分ほどのところにある聖ピータース教会で行われた。開会式は議長(W. F. Prud'homme van Reine)、IPS会長(M. Guiry)、アメリカ藻類学会長(L. J. Goff)らの挨拶によって進められたが、スピーチの間にはオルガンやフルートの演奏が行われ、美しい音色が教会中に響きわたり、参加者の耳を楽しませてくれた。大会は、午前中に基調講演(教会で1時間)とシンポジウム(ライデン大学で2時間半)、昼食後に口頭発表(大学で3時間)と

ポスター発表(教会で1時間)という、大学と教会の間を1日に2回歩いて移動するといった形式で進められた。教会を利用した点はユニークで新鮮だったが、テレビのモニターに映し出されたスライドが小さく見にくかったこと、ポスター会場としては狭く暗かったことなど、あまり実用的ではなかったように感じられた。著者は主に進化・系統に関するセッションを聞いていたが、核酸の塩基配列に基づく分子系統学的解析を取り入れた発表がかなり多かったのが印象的だった。ポスター発表では色をふんだんに駆使したカラフルなものが大半で、模型を貼り付けたものや3Dメガネを備えたものなどユニークなポスターもあった。

宿泊に関しては、ホテル、学生寮、ドミトリーなど様々な宿泊所が用意されたが、ライデンの町はあまりホテルが充実していないらしく、バスで1時間かかるホテルに割り当てられた参加者も少なからずいたようだった。昼食は大学レストランにおいてバイキング形式で用意された。パンがなかなかおいしく、毎回食べ過ぎて午後の口頭発表のときは眠くなって少々困った。会議期間中は常に晴天で、毎日28度近くまで暑くなったが、例年これほど暑い日が続くのは珍しく、こちらでは異常気象らしい。多くの民家がエアコンを持たないせいか、夜遅くまで通りに椅子をおいてビールを飲んだり話をしたりしているオランダ人をあちこちで見かけた。著者も毎晩水路のほとりでハイネケンビールを飲んで涼をとっていた。

大会なかびはエキシカーションで、全日、半日あわ



ポスター会場でのひとこま (左:Linda Graham, 右:横山亜紀子)



聖ピータース教会での閉会式。(写真:横山亜紀子, 東北大学)

せて19のコースが用意された。全日コースは湖やダイクなど水辺に行くものがほとんどだった。懇親会は“semi-floating banquet”ということで船をイメージしたレストランで行われ、生バンドによる演奏やカジノ（もちろんお金はかけない）が宴を盛り上げていた。

少々脱線するが、ライデンの町には博物館がいくつもあり、大会の合間をぬって博物館めぐりを楽しんだ参加者も少なくなかったようだ。著者は科学博物館しか行けなかったが、そこには初期の光学顕微鏡や電子顕微鏡をはじめとして、年代物の科学機器や19世紀のエキササイズマシンやマッサージ器など、一目見ただけでは何に使うか見当もつかないような道具が多数展示してあった。展示品の多さもさることながら、小さな建物をうまく利用した展示や、実物を動かして原理を学ぶコーナーなど、細部にわたる工夫に驚嘆させられることしきりだった。

閉会式は教会でしめやかに行われた。M. Guiry氏によるパーベンス賞の発表（計5点）の後、第7回国際藻類学会議開催地であるギリシャの紹介がI. Tsekos氏により行われた。次回から本会議は4年毎になるそうで、次は2001年に開催ということになる。著者は国際藻類学会は初めての参加だったが、興味深い発表が多く、最近の研究の動向を知ることができた点で、とても有意義な大会だったように思う。

〒656-24 津名郡淡路町岩屋 2746 神戸大学
・内海域機能教育研究センター

（編集委員長より）ご本人は本文中で触れておられませんが、この参加記を書いてくださった神谷充伸氏がパーベンス・ポスター賞の受賞者の一人であることをお知らせします。おめでとうございます。